

ブラック・ライブズ・マター運動は

なぜ起きたのか

山本玲子

米国の大統領選挙で、民主党のバイデン前副大統領が辛勝した。当選の大きな後ろ盾となったのが、黒人票である。リベラルの立場を取る民主党に属し、人権問題を重要課題ととらえるバイデン氏に彼らが投票した、当然の結果といえる。

人権を獲得するための「公民権運動」は、アメリカの歴史と重なっている。

奴隷解放宣言後も続く人種隔離

史上最大の内戦といわれ、両軍合わせて62万人の死者を出した南北戦争（1861～1865年）。そのさなかの1863年に公布された「奴隷解放宣言」で、黒人は自由の身となったが、人権の獲得にはほど遠かった。特に南部諸州での差別は根強く、黒人の公共施設の利用を禁止・制限する「ジム・クロウ法」をはじめとする黒人規制法が制定された。

差別は南部にとどまらず、1896

年の最高裁によるプレッシー判決は

「分離すれども平等」と、黒人分離は人種差別に当たらないとされ、白人優位が憲法で確保されることとなった。これらの法がさまざまな問題や事件を派生させる原因となったことも事実で、その一つが1000人も黒人をリンチ、殺害し、白人至上主義を掲げ



専用白人は自国アメリカ人から排除された。展示場。アメリカの博物館に展示された「ク」の秘密結社である。

少年の惨殺

1902年にNAACP（全米黒人地位向上協会）が設立されると、地道な活動が徐々に実を結んだ。1954年に最高裁で人種分離を違憲とする「ブラウン判決」が下されると、公民

権運動が全米で活発化した。

しかし、1955年、凄惨な殺人事件が南部で起こる。北部のシカゴから南部ミシシッピ州の親戚を訪ねていたエメット・テイルという14歳の黒人少年が、白人女性に口笛を吹いたと因縁をつけられ、リンチのうえ虐殺された。3日後、川から発見された遺体は誰か見分けがつかないほど顔に損傷を受けていた。エメットの母はシカゴで行われた葬儀でエメットの棺桶をあえて開き、その残酷性を世間に訴えた。

さらに同年12月、公民権運動のターニングポイントとなる「バスボイコット運動」が南部アラバマ州で起こった。

バスボイコット運動

白人用と黒人用に分けられていたモントゴメリーのバスは、白人席が満席になると黒人席の黒人が白人に席を譲らなければならなかった。NAACPのメンバーでもあった42歳のローザ・

パークスはこのルールを破り、ドライバーの命令に従わずに逮捕された。パークスはその日のうちに釈放されるが、これに憤ったNAACPと彼らの依頼を受けたマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師（以下、キング牧師）を中心に、黒人たちのバス乗車拒否が始まった。当時バス利用者の3分の1が黒人で、このボイコット運動でバス会社は倒産寸前にまで追い込まれたのだ。

約1年後の1956年11月、最高裁で「バスの隔離政策は違法」との判決が下される。非暴力を説いたキング牧師とNAACPの完全な勝利であった。

黒人生徒を高校から追い出せ

ブラウン判決後も戦いは続いた。1957年、南部アーカンソー州リトルロックのセントラル高校に黒人生徒9人（勇気ある9人のことを「リト



アーカンソー州議事堂前に立つ
リトルロック・ナインの像

ルロック・ナイン」という)の転入が決定した。これを知った州知事が「黒人生徒の安全を守るため」とのお題目でリトルロックに州兵を送りこみ、彼らの登校を阻止したのである。生徒を登校させようとするNAAACPと反対する知事ら州政府、地元白人たちのにらみ合いが続いた。これが全米の知るところとなり、ついにアイゼンハワー大統領は空挺部隊1200人をリトルロックに派遣、黒人生徒を護衛し登校させたのである。

しかし、登校した9人にはさらなる試験が待ちかまえていた。9人は校内で激しい嫌がらせに遭い、冤罪で停学処分を受ける者、いじめに耐えきれずニューヨークの高校に転校する者などが出た。迫害のなか、翌1958年、唯一の3年生が無事卒業する。

怒りのおさまらない知事は暴挙に出た。9月、融合された公立高校をすべ

て閉鎖し、人権派の教師を大量解雇したのだ。翌年裁判所で「公立高校の閉鎖は違憲」の判決が下ると、セントラル高校は再開し、4人の生徒が復学した。卒業まで警護付きの通学であった。

南部各地に拡大した座り込み 「シット・イン (Sit-in)」

1960年、ノースカロライナ州グリーンズボロの「シット・イン」も外せない。

黒人学生4人がたまたまダイナーのカウンター席に座り、コーヒーを注文した。実はそのカウンターは白人専用で、ウェイトレスは彼らに席の移動を命じた。しかし、4人は拒否、着席を続けた。これが騒ぎとなり、翌日は4人を含む25人が来店、カウンターに座ると、今度は地元のテレビ局が報道。その翌日には女子学生を含む60人、さらに翌日には白人を含む200人が店に詰めかけた。運動は全米に報道され、南部各地で同様の「シット・イン」運動が行われた。半年後、4人は店長に促されてカウンターに座り、食事を取る…非暴力運動の見事な勝利であった。

これら公民権運動のひとつひとつが重なり、やがてキング牧師率いる1963年8月のワシントン大行進につながっていく。

今も続く黒人への警官による暴行

黒人に対する差別は続いている。1989年に発生したセントラルパーク・ジョガー事件で、無実の罪を着せられたのは5人の有色人種の少年だった。

公園をジョギング中の女性が性的暴行を受け瀕死の状態で見送られる。犯人にでっち上げられたのが、たまたまその時間帯に公園にいた5人の少年たちだった。警察の強要による虚偽の自白をもとに少年たちには実刑判決が下る。皮肉なことに刑期終了後、真犯人が現れ、彼らの無罪は立証された。この事件はネットフリックスの『ボクラを見る目』としてドラマ化されているが、黒人の母親たちが警官に抵抗しないようわが子に語るシーンが、まさに差別の現実を物語っている。

1992年のロサンゼルス暴動の発端となった「ロドニー・キング殴打事件」も、黒人であるキング氏への白人警官(1人はヒスパニック系)によ

る激しい暴行と警官の無罪判決が原因だった。

2014年にはミズーリ州で、丸腰の黒人青年が白人警官と言い合いになったことから射殺される事件も発生した。

そして、2020年5月、ミネソタ州で起きた警官によるジョージ・フロイド氏の窒息死は、SNSを通じて世界に配信された。これをきっかけとして全米で「ブラック・ライブズ・マター」※運動が巻き起こったのは周知のとおりである。そのときの警官も4人のうち3人が白人(1人はアジア系)であった。

現在でも白人警官による黒人への暴行はあつとを絶たせず、根深い人種差別問題となっている。

人権派としても知られているバイデン氏。国内のBLMはもちろん、外目を向ければウイグル、内モンゴル、そして香港の人権問題を抱える中国にどう対応するのか、世界の耳目を集めることは間違いない。

参考までに、近年、アメリカに住む黒人をアフリカ系アメリカ人 African-American と表現するのが一般的。

※ Black Lives Matter は「黒人の命も重要だ」「黒人の命を軽視するな」といった意味